

早稲田大学田無寮OB会講演会

(2019年10月19日、大隈ガーデンハウスにて開催)

『平成の政治を振り返り令和を展望する ～松下政経塾の功罪を自問しつつ～』

講演者:河内山哲朗(松下政経塾塾長16年～18年)(S56年卒寮)34才で山口県の柳井市長

(平成になって)それまでの中選挙区と全く違う形で小選挙区制が(1996年に)スタートした。ただ、その結果として政治家は小粒になった。地方選出の国会議員は、国会が始まると地方に帰らなくてもよく、平時でも月曜から金曜までは東京で、土日のみ選挙区に戻り、行事やお祭り、講演したりと動く。しかし、東京選出の議員は、国政と選挙区が同一であるため、国会会期中だからといって選挙区を無視することは許されず、落ち着いて仕事をするができない。現在問題になっている練馬区選出の早稲田出身菅原一秀(経産大臣)もその犠牲者といえるかもしれない。東京選出議員は、細かく選挙区をフォローしないと当選できないのが現状であり、(本来のやるべき国政の仕事ができず、選挙区回りなどに注力しなければならず)結果として、小粒にならざるを得なかった。また東京選出議員は、地方なら問題にならないようなことまで突かれてしまう。しかし、そうでもしないと当選できない。これが東京地区選出国会議員の現状であり、ある意味かわいそうである。(東京で一番人口の大きい区は世田谷区(90万人)であるが、衆議院議員は二人もいる。同区選出の国会議員も区長と同じような目線で選挙区をフォローしなければいけない。)

平成時代30年を振り返ってみると、小選挙区制が本当によかったのだろうかと思うこともある。

平成になって作られた政党は、ものすごくある。(スポーツ平和党、平成維新の会、日本新党、新党さきがけ、新生党、これらは政権に参加したのでまだ記憶にあるが、新党みらい、高志会、新党護憲リベラル、護憲新党、新党あかつき、公明新党、自由連合、市民リーグ、改革の会、柿沢自由党、新進党、社会民主党、(旧)民主党、太陽の党、フロムファイブ、新進党、自由党・・・そして最近では、立憲民主党、国民民主党、令和新撰組など)山ほど政党が出来て、そして消えた。世界中でこれだけの政党が出来たり、消えたりした国は、アメリカにもないし、ヨーロッパにもない。ドイツは比較的政党はいっぱいできるが、それでも左派、極右ができる程度で日本ほどではない。結局、小選挙区が始まって、以前から残っている政党は、自民党、共産党、公明党だけになった。あとは全部変わった。

今、自民党が好きで好きでしようがないという人(絶対、投票に行くと自民党に投票する人)は、どの新聞社調査でもせいぜい15%。そのため、(特定の政党を支持するということがない、いわゆる)無党派を、選挙の時にどれだけ確保するかで選挙は決まる。大都市の投票率は30%程度しかないので、コアの支持率を持っている政党(自民党)が30%の半分の15%くらいをとる。共産党のコア支持層は3~4%。そしてそれ以外はいつも右往左往している。これはしっかりした選挙制度を持っている先進国の中では極めて異例である。

私が大学を卒業する前年、昭和 55 年に経営の神様と呼ばれる松下幸之助さんが松下政経塾を作った。しかし、松下政経塾はオブラートに包んだ建前論でできたものであり、松下幸之助さんは、本当は政党を作りたいかった。『とにかく、日本で政権交代しても大丈夫なようなもう一つの軸を作らなくてはダメだ。自由民主党が悪いというわけではない。しかし、自由民主党もいいところもあれば、ダメなところもある。自民党がもし失敗した時には、反対の党でちゃんと政権が作れるような一つの塊をつくらなければならない。いろいろの人に頼んで、いくばくかの金を自分は集める用意はある』と。松下さんは、松下政経塾に70億円を出したのだが、政党が成功するなら 300 億円でも 400 億円でも出してもいいとも言った。鳩山さんは、民主党を作ったとき 20 億円だしたといわれている。松下幸之助さんが本気で 3~400 億円をだしたら、塊ができたと思う。しかし、当時、松下幸之助さんは 85 歳であり、京セラの稲盛さん、ワコールの塚本さん、東京ではウシオ電機の牛尾さん、西武の堤義明さん、関西に強い住友銀行の堀田さんなど東西の財界から猛反対された。みんな、松下さんの趣旨には賛成するが、本当に政党を作ったら、昔、外務大臣をやって金のハンカチが雑巾になったと言われた藤山愛一郎さんのようになると。また政党を作るというのは時期尚早でもあるとも言った。

それで、松下幸之助さんは、「じゃあ、手間暇がかかるけれど、人を育てよう」と第二義的な意味で松下政経塾を作った。将来、日本の政治をしょって立つような人材を育てようとして松下政経塾を作った。私は、第二期生で入ったが、当時、松下幸之助さんから言われたことは、大学を出たばかりの者にとって(幸之助さんの話は)猫に小判のようだったが、それでも明快に覚えているのは、「このまま行ったら、日本は政治だけでなく、経済もダメになる」という幸之助さんの強い危機感だった。

松下幸之助さんは、ずっと現地現場を歩いてきた人ゆえに、ものを見る達人であり、先見性をもっていた。「これから何十年したら中国は、必ず日本より大きくなる」と。1980 年に中国の鄧小平さんが副首相として来日して新幹線にのって来た時、「新幹線はものすごいスピードなのにテーブルに置いたお茶がこぼれない。中国の時速 30km の列車よりも揺れない。これは立派なものである」と言った。そして(大阪の門真市にある)松下のテレビ工場に行った。鄧小平さんの要請もあり、松下電器は日本の大手企業として初めてTVのブラウン管工場を北京に作った。

そんなことをやった直後に松下政経塾を作ったので、松下幸之助は、「(中国で事業をやるには)中国をよく知っている人間がやらないとダメ」とか、「中国はいずれ本当に超大国になるはずだから、その時日本はなにで生きてゆくか一生懸命考えないと立ち遅れる。

しかし、そういった危機感を政治家は(残念ながら)持っていない。戦後から一生懸命やってきた勤勉さだけでは、今後を乗り切ることはできない。乗り切るためには、大ビジョンが必要。たとえば、日本はこれからどうして世界の中で尊敬を集めてゆける国になるにはどうするか、日本は何をやったら経済的に成り立つ国になれるのか。このような課題を政経塾の生徒は、一生懸命勉強して国家・国民の為にそれぞれが得意分野を持

って役に立つ人間になってくれ。大学の先生や偉い人の話を聴くのではなく、今、誰も考えられないことを思いついてやってゆけるような人間になってくれ」と言った。

平成 30 年間の政治を振り返りながら自分がどのくらいやったかを振り返った場合、私自身も反省している。

松下幸之助さんは、『今やっている延長線上ではなく、新しいビジョンをちゃんと作らないといずれ息詰まる。事実、息詰まる状況が、いっぱい見え始めている。しかし、(最大の問題は、)みんなその状況を見ようとしないことだ。塩が甘いか、辛いかは、舐めてみないとわからない。人に腕を曲げられても、痛いかどうかは、やられてみないとわからない。自分が体験しないとわからない。体験もしないで(わかったふりをする)頭でっかちに日本はなっている。(松下の)工場長に、現状をたずねると当たり前の答えしか返ってこない。そんな答えを私(松下幸之助)は求めていない。自分の目で見て、自分の耳で聴き、自分の手で触ってみて、自分で舐めてみて、そして自分で考えだす人間を作りたい。と同時にそういうことを体現する一つの塊も作りたい』と。

この二つについて自分自身がどうだったかを振り返ってみると、私のような大学出たてで入塾した人間も社会人として経験した後に入塾した人間も、松下幸之助さんから勉強する機会をいただいたにも関わらず、(幸之助さんの夢を)実現できなかったこと、そしてそういった人材の大きな塊をつくってゆくことが出来なかったことを反省しています。

私は、松下政経塾の塾長を拝命した後にやろうと思ったことは、松下政経塾で勉強した人だけで日本を作ろうと思っても数が足りない。しかし、全国各地には、ものすごく優秀で日本の将来を担える人材はいる。地方の市会議員でも県会議員でも国会議員でも優秀な人材はいる。それゆえ、現状に満足することなく、次の時代はかくあるべきと一生懸命考える、そういった高い志を持った人たちを探して歩かなければいけないということだった。

優秀な人たち(政治家)でも 10 年後は二つに分かれる。

政治というのは数が必要なので、(自身の意見に賛同してもらえず)少数派のままで推移し夢をあきらめるタイプ。政治の世界は、結構いじめがあるので、立派な志を持った人が生き残ってゆくのは大変である。

そしてもう一方は、10 年もたつと長いものには巻かれろと考え、多数派に取り込まれ爽やかさがなくなってしまうタイプ。

私は、優秀な人をできるだけ集めて、政治の波に流されず当初のやる気を失わずに頑張りぬくという塊を作れないかと考えて行動してきた。

現在、一般社団法人東京経営研究センターで代表理事をやらせてもらっているが、そこでもその考えで活動している。東京経営研究センターでいい人(優秀な人材)を埋没

させないため、優秀な人材はエネルギー補給しなければいけないので(エネルギー補給のため)勉強の機会を作ってゆくようにしている。

先般、知り合いの市議会議員の人が、地球温暖化対策で生ぬるいことをやっているのはダメだ、お手本となるような場所を見に行きたいと言うので、一緒に環境先進国と言われるスウェーデンに行った。スウェーデンは、北にあり世界の環境変化の影響を最初に受けやすいので、環境には敏感である。自然エネルギーを作るというだけでなく、社会がそれで潤ったり、雇用を生み出したり、エネルギーの循環をさせようと、太陽光だけでなく、ゴミそのものをもう一回、エネルギーに変えるといった取り組みを行っている。日本では、道の駅のような直売所で自分が育てた農産品を売っているところもあるが、大半はまだ足腰が弱い。地方ならではの成り立つものをやるとか、(給与が安く、労働が過酷などの問題はありますが、)介護とかケアとか地域の中で完全に回してゆけるものを産業化してゆこうと考えて、真剣に活動している地方議員もいる。それゆえ、私は、このようなことを見てくださいというものを作ってゆきたい。私は市長の仕事もし、それ以外にもいろいろの仕事をやってきたが、自分で考えて、自分で実行する人が一人一人と増えてきて、国の言うこともきくが、(国に頼るだけではなく)自分たちは自分で生きてゆくという自立の道を歩まなければ、日本はうまく回らないと思っている。

皆様方の中にも、まだまだ日本はいけると考える人もいれば、いやもう駄目だと考える人もいます。平成が始まる頃には、中国は日本のGDPの8分の1か9分の1だった。それが2009年には1対1となり、2019年(現在)3対1となった。日本のGDPは、1995年に5兆ドル(500兆円)だったが、その後ピークは5.3兆ドルになったが、現在は5.1兆ドル。ここ25年間日本はほとんど変わっていない。変わっていないということは、停滞したということです。

なおかつ、若者の大卒初任給は平成元年は16.1万円が、アベノミクスでよくなったとはいえ今年はまだ21万円。これでは、昔、給料がまた上がった、ボーナスが増えたといった感覚は今の若者にはまったくないと思います。かわいそうである。サラリーマンの所得についても平成元年は402万円だったが、平成19年は441万円にしか伸びていない。株価で言っても平成元年12月に日経平均で38,957円。それが最近では25,000円。これが日本経済の実情です。

平成の政治改革というのは、自民党にもほころびが出てきたから政権交代可能な政府にしなければいけないと言って、(大騒ぎをして)小選挙区制を取り入れたのである。事実、二回政権交代している。細川さんを首班とする連立内閣そして2009年の民主党政権。しかし、2回政権交代したのだが、残念ながら松下幸之助さんや世間一般の人が思っていた、自民党とがっぷり四つを組むだけの力を持った政権というものにはならなかった。これが私自身も含めて大反省しなければならないと思っています。

結局、みんなスタイルを追っただけだった。(政経塾の反省でもあるが)年寄りよりも若い方がいいだろうと思ったけれど、残念ながら若い人は実力がないのですぐにダメに

なってしまった。若くして出てきた人もたくさん見てきたが、長続きした人の方が少ない。十人に一人と言っても過言ではない。そして学歴がある方がいいでしょうと言うので、英語がペラペラ話せる人やアメリカの大学を出た人もたくさんいるようになった。しかし、そういう人で日本の経済をよくさせるための実力を持ったり日本経済の真実を知っているかという点意外にない。たしかにスタイルは知っている。たとえば、政治家は、官僚の僕（しもべ）のようなことをしてはいけないとか。じゃあ、そのスタイルを変えて日本の求めるものは一体なんなのかを訊ねても答えが返ってこない。というより分かっていない。経済においても構造改革がいいということはだれもわかっているのだが（もっとも構造改革は失敗したので、構造改革という言葉を嫌いな人もたくさんいる）、どう変えるべきか、一番大切なことが分からない。これは小泉さんにも責任はあると思う。

小泉さんの時代には、郵政事業を変えないと日本はダメになると言ったが、本当だろうかと思った。実は当時、私は自民党から誘われて、幹事長代理をやっていた安倍さんから、「河内山さん、候補者が足りないので出てくれないか」と言われた。しかし、私は「郵政民営化で日本が良くなるとは思わない。だからそれにはあまり賛成できない」と言ったら、「いやいや、それが選挙の争点なのだ」と。そもそも構造改革の設定が間違っているのである。郵政民営化が構造改革ではない（と思った）。本当の構造改革とは、日本が外国と負けない分野を見つけ出して、特化するということであり、日本が他の分野で負けないためにどうするかが本当の構造改革なのだ。しかし、それがまだ出来ていない。

それゆえ、今やっている韓国に対する輸出の厳格化も日本にとって本当にいいことなのだろうかということを議論しなければいけないとも思う。サムソンの会長も社長も早稲田出身で、社長とは3回話したことがあるが、自分たちは日本と同じ土俵で戦っていても勝てないので、日本が絶対行かないサウジアラビアやアフリカで勝負をするのだと言っていた。それゆえ、高度なフッ化水素がなくてもあまり困らないようどこかで調達するのだと思っているかもしれない。

日本は、どう生きてゆくかももう一度考えなければいけない時期に来ているのでは、と自身がやれなかったことを反省しつつ私の講演を終わりたいと思います。
(記載:2021年4月28日)